世界を救うのは俺じゃない

音風 奏 （雅董杏みつ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を救うのは俺じゃない

【Ｎコード】
Ｎ９７９９Ｒ

【作者名】
音風　奏　（雅董杏みつ）

【あらすじ】
中学での生活が今年で二年目になる俺は、はっきり言ってどこにでもいそうな凡人だ。どこぞのヒーローじゃあるまいし、世界を救うなんて・・・・・・
だけど俺の知らないうちに、俺の運命指数は上がり始めた。
自称異世界からきた魔法少女、自称一度死んでから甦った鬼、自称時を駆ける人造人間。それぞれが俺を守るために俺のもとに来たという。
それぞれの刺客が俺の元にくるたび、失った記憶の欠片が俺の中に

甦る。俺はは一体何者なんだ？

始まりは突然に／まだこのときは・・・・・・

季節は春。４月。
　俺は俺の通う中学校へと続くクソみたいに長い道を歩いている。今年から2年か。などと新入生らしき生徒の乗った自転者が四台ほど駆けて行ったのを見て思った。初々しいね。まるで中学校が神秘の宝庫だと言わんばかりに、期待に胸を膨らませて軽やかにペダルをこいでやがる。
　しかし2年かぁ……2年、ねぇ。
これから始まる学校の授業は今までよりかなり大変になるんだよな、と思っちまったせいだろうか、少し憂鬱だ。
「おーい、ウル」
　俺が自分で暗くなっていると、後ろで声がした。
「なんだ、お前か」
　振り返ると、そこにいるのは見慣れた顔、
「そうだ。悪いか？」
　俺の肩を軽く叩くこいつは、イブキという俺の友達だ。
「別に悪くはねぇな」
　中学一年の二学期、泉谷中学校で行われた文化祭のようなものである「泉谷フェスタ」の練習期間に知り合った。当時の吹奏楽部は幽霊部員の先輩が多かったのだが、その中でたった一人トランペットを吹ける人材として目立ちまくっていた。その時発表されたミュージカルの演奏はこいつのトランペットだけだったという噂もあるぐらいの有名な奴で、そのミュージカルでは主演を勤めさせられた俺とは容易く打ち解けた。最初は互いの苦労を愚痴りあうだけの仲だったのだが、いつの間にやらあら不思議、今のような関係となってる。
イブキ本人は運動部でもやっていけるぐらいのとてつもない体力系であるくせに、トランペットに集中するためにそれまでやっていた

サッカーから完全に足を洗ったと聞いている。そのためか付いたあだ名が「体力ラッパ王」。何ともまあ奇妙な二の名を持つこいつの本名はイブキ・オーシャとか言って、まあ何と言うか、簡単に言うと外人とのハーフなのだ。髪もやや黄色いし、かなりボサボサなのをそのままにしてあるのは、彼ら家族がファッションとか身だしなみとかにこだわりが無いからだろう。ちなみに俺も、ファッションにはこだわりを持っていない。どうでもいいが。

「ところでウル、やっぱ髪切れよ。中学生でそれはないぞ」

「いつもの事だ。気にするな」

俺はイブキが髪に触ろうとするのを避けた。確かに長いかもしれないが、人に触られるほどみっともないハズじゃないんだけどな。ちなみにウルというのは俺のあだ名で、知らないうちに定着している。俺からしたらそんなことどうでもいいが。

かくして、行った十分後には忘れちまいそうなかなりどうでもいい会話をしながら歩いていた俺達は現在、玄関前の道の分岐点に張られたクラス分け票を眺めていた。

「おっ、同じクラスじゃん。改めてヨロシクな、ウル」

確かに俺の名前の書いてある列の上から五番目に、こいつの名前が書かれていた。今年は二人そろってB組らしい。ちなみに俺の出席番号は十二番だった。

ところでこの泉谷中学校。玄関を作る時に大工がミスをしたらしく、二年生は出席番号が一から十一番の生徒と、それ以降の生徒とで玄関の位置が違う。B組もその二年だ。そのため俺は一階だが、イブキは二階の玄関だった。

人は誰でもミスをするが、それをこんなに大胆に犯してしまった当時の大工をあっさりと許してしまう初代校長の心の広さに俺は感嘆したという覚えがある。中一の入ったばかりの頃だ。

ま、今はそんなことはいちいち考えていないが。

さて、階段で別れた俺達は、教室でまた、ということにしておいて、それぞれがそれぞれの玄関に向かった。

これを小説とするならここまでがプロローグだろう。
これからあんなことになるなんて。いや、あんなことをしなくてはいけなかったなんて思いもしなかった時までだ。
俺の、いや、俺達のきっかけから、第一章としようではないか。

始まりは突然に／迷える少女は・・・・・・

ところで忘れていたが、後に述べる機会がなくなる可能性があるので今のうちに言っておこう。俺には小四から小六までの記憶がない。

と言っても、勉強とかの基礎知識や、４０％ぐらいの出来事も覚えている。

一つ、なにかが誰かが抜けいてる気がするんだ。

家族は知らないらしいが、その「忘れたなにか」が「思い出して」と呼びかけ続けている。　今もずっと。……そんな気がするのだ。

俺が玄関に行こうとすると、玄関であるものを見た。

俺より少し小さめの人影……少女だ。

俺に背を向けて、立ち塞がっている。

「おい」

真っ黒のショートヘアーがピクッ、と小さく揺れて、彼女はこちらを振り返った。マスクをしていた。それでも分かる。結構な美人だ。

目が大きくて、無表情が定着していそうな顔。それが、よく見ると少し困惑に染まっているようにも見えた。というのも、目の形と視線だけで判断したからであり、鼻から下がマスクで隠れていて見えないから誤認しただけかもしれない。

それでももし本当に困っているのだとしたら見逃すわけにはいかない。俺はその少女に向かって歩き始める。彼女の近くまで行ってから、

「どうしたんだ？」

俺はその少女に話しかけるた。　すると、彼女は何を躊躇っているのか、彼女は１分ほど口を開きかけて閉じることを繰り返す。

やがて、小さな声でこう言った。
「……私の靴をいれる場所、教えて……ください」
ビックリだ。どうやら下駄箱の場所を知らないらしい。編入生だろうか。考えていたため結論に少し時間がかかったが、
「お前、編入生か？　だったら編入するクラスと名前を教えてくれ。それでなんとなく分かると思う」
俺が落ち着いてそう聞くと、彼女はゆっくり答える。
「今年からこの中学校で二年B組に入ることになり……ました。私の名前は屋凪紫……です」
……俺の見解は間違っていなかった。どうやら彼女は本当に編入生らしい。しかも俺と同じ二年B組だと言う。これは驚きだ。
驚きながらも、俺は彼女のロッカーを探してやる。彼女のロッカーは俺のを右へ5つ進んだ所に見つかった。
それを彼女に教えてやると、彼女は一瞬だけ笑った素振りをして、俺にこう言った。
「……ありがとう……ございます」
一瞬、心をこめて伝えるとはこういうことなのではないかと思った。それほどまでに彼女が純粋なのかは分からなかったが、ちょっと嬉しく思ったのは間違いない。
彼女、つまり屋凪は「職員室に挨拶に行くから、後で担任の先生と一緒に行きます」と言って俺と別れ、俺は一足先に二年B組の教室へと向かった。彼女は迷ったりしないだろうかと一瞬考えたが、職員室までは玄関を東へ一直線に進むだけで簡単に着くからまあ大丈夫だろうと思い直した。
そして俺が二年二組のクラスに着くと、こいつが隣りだった。
朱藤千子。
こいつは綺麗な瞳と栗色のロングヘアーがトレードマークで、容姿も良く、どちらかといえば成績優秀で、クラスを問わず人気がある少女。よりによってコイツとは。やっぱ憂鬱に染まりそうだな、俺の二年生ライフ。

なぜそんな千子を俺が嫌うのか。それには簡単な理由がある。
彼女とは一年のころ、一度だけ班が一緒になったことがある。当時唯一の友達だったイブキとは違うクラスだったため、クラスで浮きかけていた俺にしきりに声をかけて馴染せようとした、漫画的アニメ的な委員長キャラ並みの積極的な女子なのだ。
積極的なわりに気が弱く、気の許す奴の前ではすぐに泣く。というよく分からない性格をしている。正直に言うと、ただ子どもっぽいというだけなのだが。
ちなみにイブキの席は結構遠かった。どうでもいいけど、一応報告しておこう。

ほぼ新しいメンバーの自己紹介だけでにじかんを費やしていたホームルームも終わりに近付いた頃、いよいよ屋凪が教室に入ってくることになった。
編入生というのはみんなに紹介するのが普通だろ、というのが新担任浅野の言い分であり、挨拶をしっかりとさせるために時間差で彼女を教室に入れることにしたらしい。だからといって彼女を一人だけ四十分近く廊下に待たせるのはどうかと思う。つつがなしや、屋凪。
編入生が来ると言う事だけでクラスは盛り上がる。何でそんなことにいちいち盛り上っていらるのかを聞きたいぐらいなのだが、クラスの空気は上がってるんだからそういうことに無関心な俺はクラスの雰囲気から浮く。まあ、いつものことだ。
そんなことを考えている内に浅野担任が「入って来い」と言って扉を見た。それを合図に屋凪は扉をあけて入ってくる。
まだマスクをしていたが、外そうと思っているのか、顔のマスクに手をかけていた。
なぜか俺のときとは違い、敵対するような眼差しを全体に投げる。

しかし一通りの顔を見渡したあとで少し安堵した顔つきになり、緊張からか固まっていた表情も少し柔らかになった。。

「今日編入して来た――――」

始まりは突然に／目の前の景色は・・・・・・

「屋凪紫……です」
先ほどからマスクに手をかけているものの、なかなか外そうとしない。
そんな屋凪はなぜか強がっているようにも見えるが、しきりにこちらをチラチラと伺っている。何のつもりだろうか。
そんなことを考えること数秒、やっと彼女は顔からマスクを剥ぎ取り――
「んなっ！」
声を上げたのは俺だ。思わずそのまま立ちあがる。そのためだろうか、全員が俺を振り向いている。隣の千子もだ。
「ウルル、どうしたの？」
俺のあだ名が「ウル」なのは承知だと思うが、なぜかこいつは「ウルル」と呼んでくる。
いや、そんなことはどうでもいい、いつもの事だからな。問題は屋凪の方だ。
「なんで、お前……が、ここに？」
俺は問う。しかし彼女は不思議そうな顔で見つめ返してくるだけだ。
「ねぇ、知り合いなの？」
千子にそう問われて気が付く。
何をしているんだ。冷静に考えろ。俺は彼女を知らないじゃないか。

「いや、すまん。取り乱したな」
何に、と、自分に問いたいが、まあいい。
「俺の気のせいだ。続けてくれ」
俺はそう言って、座りなおそうとする。
が、突如俺の頭に刺激が走った。
「がっ……」

視界が９０度回転、ドサっ、とにぶい音と、右半身に痛みが走る。
「大丈夫？」
千子が覗きこんでいるのが分かる。どうやら俺は倒れたようだ。
だがそれを理解した直後、また頭に激痛が走る。
「あっ……！」
脳内なにか、風景のようなものが映し出される。見たことのないはずのに、見たことあるような風景。　千子の覗きこむ角度と全く同じ角度から、濃い紫のポニーテールの少女が覗きこんでいる。そんなヴィジョンが頭を流れてくる。黒いワンピースのような服を着て、この世にあっていいのかと思うぐらい素晴らしく似合っているポニーテールの髪とその柔らかそうな指で俺の頬を撫でている女の子。
なぜだろう。その少女が俺に「大丈夫？」と問いかけているような気がする。
そして、なぜかその少女の顔立ちがはっきりと見えない。
「俺は……」
自分が今何故声を発したのか、既にそれすら分からなくなった。
くそっ、頭が……重い、
意識が……もたない。
そう感じた途端、目の前の景色とヴィジョン強く混ざってが遠ざかり、俺の視界は、黒く、黒く塗りつぶされた。

始まりは突然に／原因は一体・・・・・・・

気が付いたら、俺の視界には白いタイルが規則的に並んだ天井があった。
体をひねって視界を回転、するとそこには青色の花瓶と黄色いコスモスの花が一、二、……五本ある。
そこにある窓から見える景色は、オレンジを思わせるような色の幻想的な空だった。遥か彼方には黒い空もある。
それを見ていてやっと理解した。あの直後俺は意識を失ったんだ、と。
ふと目をやると、花瓶の下の棚にデジタル表示式の電波時計が置いてあった。まだ上手く回転しない頭を無理やり回す。
同じ日の午後5時少し前、ここは市立泉谷病院の病室ようだ（前に一度、親戚の見舞いに来たことがあったから分かる）。
俺はその中心におかれたベッドに寝かされていた。あの後運ばれたのだろうか。
とりあえずそれらのことを確かめようと、俺はベッドから起き上がろうとする。そのときやっと、初めて自分の足に何かがあることに気が付いた。
なんだ？
左足のすねあたりで、栗色の毛の塊が定期的に上下に揺れている。
誰だと思いつつ、一人だけ心当たりがあった。そいつの名前を口に出してみる。
「起きろ。千子」
栗色の髪の正体、千子は、ふぇ、と声をあげて、俺を見た。
「ウルル！」
ビックリしたかのように飛び起きて、
「よかったぁ～」
千子はその場にへたり込む。　俺はそんなに心配されるような状

態だったのか……ってそりれもそうか。そもそも病院まで来てるんだしな。……ただ気を失っていただけだと思うが。
「そうじゃないけど、なんとなくね。何だか頭から離れなくて」
だからつまりそんなに心配させるような事だったってわけか。何で倒れたのか本気で疑問になってきたぞ。
ん、待てよ。
「じゃあお前は、いつからここにいたんだ？」
俺が聞くと千子は考え込むような仕草をした。その後、
「ウルルが倒れたのが九時ちょっと前で、そのあと私は救急車に一緒に乗って、9時半に付いたの。それからはトイレと花の水やり以外ずっとここにいたよ」
どうやら約八時間もの間、俺を看病してくれていたらしい。嬉しくないわけではないが……、
「そこまで俺に費やす時間があるなら勉強しろよ」
「だって、手に付かなかったんだもん。……それとも、ウルルを看病したらだめなの？」
何だか涙目になって言ってやがる。こいつが俺に涙を見せるのはいつ以来だろうか――いや、よく考えたら二日前にも泣いていたな。商店街でもらった風船が木にひっかかったとかで。
「分かった。だから泣くなバカ」
俺はそうなだめて、窓の外を見る。なんだか、無駄に時間を過ごしたようで少しイラっと北が、まあ今更どうしようもないか。
「うん……。あ、そうだ！」
再び振り返ると、千子は思い出したように袋から赤くて大きいりんごを取り出した。病室の人工的な光を反射して、とても美味そうにみえる。
「食べる？」
食べない理由などないし、丁度喉が乾いていたからもらう事にした。りんごを食べ始めてから体に何かあったらどうしようと考え始めたが、どうせ後の祭りだから放っておこう。

医者から聞いた話だが、原因は不明だそうだ。一時は呼吸さえ止まりかけていたらしいのだが、まあ今はこうやって無事なんだから気にすることではないだろうと俺は考えた。
しかし、今回誠でやはり関わっていそうなのは……あの、紫のポニーテールの少女の映像だろうか。いやそもそもあれは一体何だったのだろうか。関連する物を脳内から呼び起こそうとするのだが……何だか思い出したくない映像のようで、強く鍵がかかっているかのようにまったく分からなかった。
まぁ、過去なんてどうでもいいから忘れたんだろうな。きっと。
ちなみに、俺の家族もここで看病してくれていたらしいのだが、芸能人の講演会があるとかで、全員先に帰っちまったらしい。白状者まみれだな。俺の家族。
てなわけで、俺達二人は二人だけで歩いて帰る事となった。だからこそ、いまその帰宅道を歩いているわけだ。

ここまでを第一章とすると、第二章はとても長くなるような気がする。
だけどこの時は、気付くってか、予想すらしなかった。
まさかその後の俺達の未来が、ここまで過激になるなんてな。
思えば運命はどこから変わったんだろう。
いや、厳密には戻ったという表現が正しいのかもしれない。

襲撃は突然に／何故記憶がない・・・・・・

俺達が帰路についてまだ１０分も立っていないのに、空はもう黒くなりつつあった。よく考えれば当然だろう。結局三十分近く医師と話していたからな。

「ねぇ。ウルルぅ」

そんな帰路の中で、千子が唐突に聞いてきた。

「結局、あの子と知り合いなの？」

確信を突くのが好きなのか、本題から来たな。

ここでの答えは色々あった。最初は心配をかけまいと思い留まって、「あー、えっとー」を繰り返していたが、嫌いなやつとはいえ、千子はイブキを除いて中学で初めて出来た友達だ。本当のことを言おうという意見のほうが、脳内人格の多数を示していた。だから「なんでもない」とか「気のせいだった」で済ますのをやめ、彼女に真実を言った。

「分からない」

そして、付け加えるように全てを話した。ポニーテール少女の映像。記憶がない事は黙っていたために、更に付け加えてその事も話した。

「ウルルって、私の思っていたより大変だったんだね」

千子から、やけにもっともな感想を述べられた。

「私ね、ウルルっていいな、なんて思ったこともあったんだよ？」

「俺が？　俺のどこがいいんだ？」

俺が問い返すと、彼女は俺から目を逸らして、

「今のウルルは悲しみを知らないから。……誰のせいでもないのに自分で抱え込むしかない、行き場のない悲しみを、今のウルルは知らないから」

何を言ってるんだ？

「えっと……それはどういう意味なんだ？」

新手の謎解きゲームか？
「ううん、なんでもない」
なぜか千子は、そのまま黙り込んでしまった。何か言おうと試みたが、なんだか空気が重く感じて、俺達は互いに沈黙したまま進んでいた。
このままいけば途中で分かれ道に差し掛かり、互いの帰路の都合上、そこで分かれることになる。

千子と分かれた後、俺は一人で歩きながら考えた。以外にも今まで一度もマトモに考えなかった疑問について。
「何故、記憶がないんだろう？」
今朝見た映像は、見たことがあるような映像だった。つまり、それはきっと俺が切り取った記憶の断片から生まれたものだったということなんだろうか？　だとすれば、俺は何故記憶を失ったのか。結局そこへと疑問は辿りつく。
などと考え事にふけっていたため、
「君、さっき記憶がないって言っていたよね。それはもしかして小学四年生ごろからの事かい？」
一人の男性が歩み寄っていたことに気が付かなかった。問いを投げかけてきたので、
「あ、えっと、間違ってはいませんが……あなたは？」
と答える。それが引き金だったとも知らずに。
「ようやく見つけたぞ。アジャスター！」
何の事だ、そう思った途端、俺の中のなにかが「危ない」と叫んだ。
条件反射で体が勝手に左に動く。直後、
シュビッ

風を切る音が俺の右頬を通りすぎ、そこの皮膚に多少の痛みを感る。そこから赤い液体が出る。これは……血、なのか？
目を戻すと更に正面から銀色の物体が飛んでくる。再び条件反射で、
「んなっ！」
とっさにしゃがむ。銀色の物体は後ろのガードレールに思いっきりぶつかり、ガードレールを貫通して電柱に突き刺さった。
「感の鋭いやつだな」
正面に、先ほどの男性が立っていた。右手にナイフを持って。
そこで俺はやっと理解した。殺される、俺はこの正体不明の男に殺されかけているんだ！
男性は持ったナイフをさらに身構える。　俺はいきなり訪れた絶体絶命に、俺はただ唖然として立っているだけしか出来なかった。足が、手が動かない。恐怖で動けない！

「死ねっ！」
守りの体制に入ろうにも体は動かず、目前までナイフが振り下ろされた。
ザクリ。鈍い音とともに俺の体に激痛が……あれ、奔らない？
ふと見ると俺の前にピンク色の円盤状の何かがあり、それに刃が遮られていた。
何だこれは。そう思った途端、カキン、と金属バットで野球の硬式ボールをピンポイントでヒットさせたら鳴りそうな金属音がすると共に、ナイフごとそれを持っていた男性が吹っ飛んだ。
「なにっ？」
男性は距離をとって体勢を立て直し、不思議そうにその円盤を見て、次に俺を見た。
「情報では、まだ覚醒していないはずだが……」
何のことかは知らないが、どうやら不足の事態に驚いているようだ。

男性が呟いた直後、どこからか声がした。
「やっぱり、そろそろ来ると思ってたよ。つけといて大正解！」
聞いたことがあるようで、聞いたことのない声。その途端、ビュワッ、と強い風が俺の頬を撫で、目の前に鬱陶しい物が掛かった。
栗色のウエーブがかかったロングヘアー。
「降ッ臨！　天使の導きで！」
その髪の主は……千子のようだった。
だがよく見ると、その右頬には緑色の葉っぱのようなものが宝石のように輝きながら埋め込まれていて、そしてなにより、雰囲気がまったく違った。
「千子……じゃ、ないな。お前、誰だ？」
するとその千子に似た少女は一度こちらを振り返ってにへらっと笑い、
「じゃ、断罪を始めようか」

襲撃は突然に／意味不明な戦いは・・・・・・

「じゃ、断罪を始めようか」
それにあわせるように、それまで宙に浮いていたピンク色の円盤は、千子の左腕に巻きつけられた。ちょうど腕時計みたいだ。
「我は四つ葉の力の一つを求める。聖なる福音より賜りし閃光の波動よ、我が声に応えよ！」
彼女の声に合わせて電子音のように、
『ＬＯＲＤＩＮＧ！　ＡＮＧＥＬ　ｆｏｒｍ』
と、その円盤から音が聞こえた。途端、白銀の光とともに、そいつの体が輝き始める。
光が収まるころ、そいつの体は変化していた。白銀の羽を背に纏い、両腕の肘から先、両足の膝から先が黄色の筒のようなものが付けられ、頭上には黄色の輪が浮かんだのだ。
「さあ、導きの時だよ！」
そんなそいつは、右手で男性を指差す。その時初めて気が付いたのだが、男性はなにかを呟きはじめていた。
それは、俺には聞き取れない。理解できるのは、男性の口は人が話す時よりも小さく開いては、それを超高速で動かしている事ぐらいだ。
口の小さい人のビデオを取って、それを早回しで見ている感覚に近い……の、だろうか。
だんだんと聞こえるようになっても、意味の分からない言葉ばかり。どう考えても日本語ではない。英語……も考えられるが、伊達に去年一年間勉強していないから、少しは分かるはずだ。それでもわからない所を見ても、その可能性は多分ゼロだろう。
　そんな事を考えていると、
「来るっ！」
　そう言ってその天使風少女（先程は千子に似た少女と呼したが、

見かけが天使みたいなのでこっちにする）は腰に巻き付いているベルトのような物の中心のクローバーが描かれた大きめの円盤に手をかざした。
何をする気だ？
「集え、裁きの光よ」
『Ｓｕｍｍｏｎ！　ＣＬＯＶＥＲ　Ｒｏｄ』
声と電子音声が俺の鼓膜を震動させる。途端、円盤に描かれたクローバーが実体化し、１箇所だけその葉が折れ、その付け根から長い棒があらわになった。
そしてその少女はその杖を手にとる。
この時よく見たら、右手の中指に黄色の宝石がはまった指輪がついていた。しかしその指輪は、杖を持ったと同時に中指から消える。どうなってるんだよ、手品でもしようというのか？
なんか色々ありすぎて考え方がおかしくなったみたいだ。といっても自分で判断できるからそこまでではないのだろうか。
「我が元に集いし閃光。その輝きは祝福を示す」
しかし俺がそんなことを考えている事を天使風少女はまるで知らない訳だから、またしてもわけのわからない事をいう。勘弁してくれ。俺を助けてくれるのはありがたいが、もっと現実的に頼む。でないと俺の頭の理解が事態に追いつかない。
そして彼女はジャンプ。夜空っぽく暗くなった空に浮いて、頭上の輪を一段と輝かせる。
この時始めて羽根の存在意義が分かった。彼女の体を空中に維持している。
「いくよっ、あたしの必殺魔法！」
途端、両手でもった杖の先のクローバーが光出す。自動的なのかその杖の先が男性の方へ向いた。
「轟け！　祝福より来る裁きの鉄槌」
掛け声と共に、杖の先から光が発射された。
同時に、男性が今までずっと行っていたブツブツ言儀式が終わっ

たようで、いつの間にか男性のすぐ前にどす黒い球体が現れていた。
その球体は、飛んできた光の光線に向けて一直線に飛んでいく。
瞬間、
ドガーン！
バゴァーン！
ドァゴァヴァゴァーン！　と、
録音機にとっておきたいほど素晴らしい連鎖爆発音が響いた。
その影響で爆風が巻き起こり、俺の目を汚す。
目をこすって再び見ると、爆風が発生して一秒もしないうちにその中から男性の方へと、光の柱が伸びた。
「なにっ？」
男性は驚きとともに身構えるが、もう遅い。
「えーいっ！」
光の柱の正体である天使風少女が放った光線は、男性の体に直撃する。
「くそぅ。覚えて……」
ろよ、と言いたかったのだろう。だがそれは言葉になる前に発生源の男性が粒状になり、空に舞ったことでかき消された。
かくして、俺の人生経験上最も死に近づいた出来事は終わりを告げたのであった。……本当に終わったのだろうか。

襲撃は突然に／おまえは何者・・・・・・

「ふぅ～。疲れた」
少女は天使風な装いをいつの間にか解いていた。腕には先ほどまでのクローバーが描かれた円盤、右ほほには葉っぱ型の宝石がしっかりと付いていることを除けば間違いなく先ほど別れたはずの千子である外見が妙にほっとした表情を顔に創っている。
さて、まずは質問タイムだ。色々と聞きたいことがあるが、まずはこの一言からだな。
「お前は何者なんだ？」
すると少女はこっちを向いて、右頬の宝石に人差し指を添えた。宝石は頬に埋まっていき、雰囲気が激変し始める。
それが進むにつれて、覚えがある雰囲気が彼女を包む。最終的には、
「私は私。朱藤千子だよ」
疑えなかった。それほどまでに千子そのものだったからな。
「じゃあ千子。さっきのは何だ、おまえは何者だ」
そう問うと以外にも千子は笑った。そしていかにもこれから嘘をつきますといわんばかりの表情をして、言った。
「魔法少女だよ」
「うそつけ」
「嘘じゃないもん」
「そんな非現実的な……」
ことがあってたまるか、と言いかけて思いとどまる。変わりに、
「魔法少女……？」
と、改めて千子に訊ねてみる。彼女は一言、
「うん」
……。
……。
……ハハっ。面白い冗談だな。

「タネを明かしてくれるか？　どんな手品だっ――」
たんだ？　と聞こうとしたが、
「疑ってるんでしょ？　だったらこれで信じる？」
気が付いたとき、俺は地面に立っていなかった。空中に浮いていたのだ。
「ウルルぐらいの体重なら、その気になれば高度１０００メートルぐらいまで一気に飛ばせるけど？」
……ハァ。
「分かった。信じるから降ろせ。そして詳しいことを話せ」
ここはまず、冷静になって千子の話を聞こう。信じる信じない云々はその後だ。

襲撃は突然に／つかの間の休息・・・・・・

「私はこの世界とは違う、魔法の世界から来たの」
第一声から否定したくなるな。そんなこと言われても。
「私たちの世界は絶対ではないけれど王政で、私はそんな中で王様に仕えている「四武将」の一人なのね」
　そしてお前なんかが四武将になれる世界ってなんなんだ。
「ある日私は、私の世界の王様にウルルを護るように言われた。だから、そのために必要な力を色々な世界から手に入れて、それからウルルの元に来たの。そしてあのクローバーはその力を出すためのもので、今回はそのうちの一つ、天使の世界の力をを解放して戦ったってわけ」
そう教えてくれる千子の顔は、委員会で言われたことをクラスに伝える時より、真剣だった。……無論、いくら真剣だろうが俺は理解できていないが。
「私が倒したのは「メアリアン」って言って、なぜかウルルを狙っているの。詳しいことは私は知らされていないけど。私達の王様は必要以上のことを言おうとしないから、もしかしたら王様なら知っているかもしれないな」
ここで俺があの男性に「アジャスター」と呼ばれたことを言ってもよかったが、千子の話を聞いたところ、彼女に言っても解らないだろうと思って伝えるのをやめた。
「あ、ちなみにクローバーの他の力は秘密。後三つあるんだけどね」
　いやいや、もうこれだけで充分に意味不明だからな。これ以上説明されたら脳内がリンボーダンスでも初めそうなぐらいに混乱するだろうな。
「あ、ウルルの家には結界が敷いてあるから、安心してね。じゃあまた明日」
そういって千子はスキップ気味に帰っていった。結界……ねぇ。

こうして家の扉を開こうが何しようが、一向に結界とやらの感覚を感じないのは、なぜだろうな。
結界とはそういう物だからだろう。そう思えば気が楽だ。と言うより、そういう事にして置いてほしい。これ以上理解不能なことを考えたくない。
「ただいま」
扉の奥に声を投げても返ってくるのは無音の風たちだけだ。先ほど聞いた話だと、両親はよく分からん演説者のところに言ったようだからな。帰りが遅いのは別にどうでもいいが、変な宗教を持って帰ってくるのだけはごめんだな。
ふと時計を見た。短針は六時をゆうに越えて、長針が3を示している。飯には早いから時間を潰すつもりで適当にテレビをつけると、子供向けのアニメがやっていた。とりあえずそれを視聴しようと思い、なんとなく見ていた。
そのせいか、ふと先ほどのことを思い出す。
メアリアンと呼ばれたあの殺人未遂男性。光る杖に、超高速のどっか語。極め付けに千子は魔法少女と来た。
俺は、とんでもない体験をしてしまったんじゃないのか、それともまだここは俺の夢の中なのか？　だとしたら、一体いつまで続くんだ？
どうやらそうやって十分ほどぼーっといたらしく、気が付いたらアニメはエンディングで主人公たちが踊りながら終わりの歌を歌っている映像が流れていた。最近よくあるよな。この手のアニメ番組。何だろう。角川スニーカー文庫出身のあれから持ってきたのか？
そんな風にアニメに関していろいろなことを考えていき、結論は「やっぱり特撮ヒーローが一番だな」に到達したとき、不意に玄関のチャイムが鳴った。
正直驚いた。心当たりがない。

千子ですら、この家のインターホンを押したことが無い。単に勝手に入ってくるからなのだが、そんなことをいちいち気にしていたら姉もそうなるし、その友達だってそうだ。
つまり、インターホンがなるのはそれ相応に重大な用事がある奴だけだ。
ま、どうせイブキあたりが「宿題見せてくれ」とか言いに来たのだろう。俺がやっていないのは言うまでもない。気絶していたし、範囲知らないし。
そう思いながら「はーい」と答え、玄関を開ける。
「あっ、お前……」
そして、そこに立っていた人物に驚いた。
「あ！　えっと、その……」
そいつはリュックを背負い、両手になべを持っている。
「少し……お願いが……」
うつむいていて顔はよく見えないのだが、声とショートカットの髪型でなんとなく予想はついた。
「あの！」
そいつが顔を上げた時点で、予想に確信が付く。
「今晩ここに……泊めて！」
そこには屋凪紫が立っていたのだ。――って、そっちじゃなくて、
「待て待て待て待て！今、なんて？」
「ここに泊めて……って」
聞き間違いじゃないよな。とりあえず冷静に、冷静に。
「何故そうなるんだ」
　屋凪が何故俺の家に泊めてというのか。そこをハッキリさせてほしい。
「お前の意図を説明してくれ。話はそれからだ」
屋凪は少しためらっていた。
それから一分ほど経っただろうか。さすがに黙っているわけにも行かないようだったのか、話してくれた。

襲撃は突然に／それでいいのなら・・・・・・

彼女の言い分は、俺が読者諸君に説明しよう。
というのも、彼女はどうやら人と話すのが苦手なようで、一言一言がいちいち尻漏っていて、そのまま文章にしても伝わらない可能性があるからだ。
さて。簡単に言うところ、彼女は母親との二人暮らしである。この辺りに来たのはいいものの、彼女達のこの町で生活する拠点の予定だったマンションの部屋が借りられる状態ではないらしく、ホームレス生活となったわけだ。初めは母と二人で一週間ほどダンボール生活をしていたらしいのだが、母の仕事に弾みが付き、今日、別の家にホームステイをすることが出来るようになった。
しかしそこは一人を雇うことすら難しく、屋凪母は屋凪を迎えてやれないというのだ。
屋凪は母を困らせまいと一日で友達を作りその人の家にホームステイすると言ったそうだが、結果初日に出来た友達の合計はゼロ。そこで母の仕事場にもっとも近くにあって、学校の同級生の家であることを前提に探してみると、なんと俺の家が一番適していた。しかも俺とは朝に会話を交わしているから親近感もある（この一文だけは俺の考察）。
と、言うことらしい。
「お願い……ほかにどこも頼れないの……、私がほかの友達を見つけるまで、明日まででいいから……」
真剣な顔で相談され、頭まで下げられたから、さすがに俺は少し考えなくてはいけなくなった。うちに泊めることに関しては、俺はかまわない。だが家族がどう思うかだ。
知っての通り、俺は健全な一介の中学二年生だ。世間的にこの歳は「思春期」と称され、人が一番異性に興味を持つ歳と言われている。
そんな俺が女の子、つまり異性を泊めるように両親に頼んでも、変

な風に思われてしまうのはほぼ絶対的に有りうる。あまりそんな事を思われたくないが、屋凪だって中学二年生。そんな歳の女の子が一人きりで野宿をすると言うことは、それこそ世間的に無理がある。となると手段はこれしかない。

「分かった。だがくれぐれも家のやつらには気づかれないようにしろよ。とくに親には内緒だ。多分今日は遅くまで帰ってこないし、今晩だけならばれない可能性もあるからな」

「ほんと……！」

「約束できるなら俺の部屋を好きなように使ってくれ。それでいいのなら泊めてやるよ」

「うん……ありがとう！」

俺が言い終わらないうちに、屋凪は飛び跳ねた。そして一度止まると、俺のほうを向いていった。

「ねぇ……その……、友達に……なってもらえる？　……ああ勿論、明日からは別の人の家に泊まらせてもらうつもりだけど……」

そんな屋凪のもじもじとした仕草が、なぜか俺の心を高鳴らせる。うわ、何だこの気持ち。

そんな気持ちのせいか、なんだか俺は反射的に答えてしまっていた。

「べ、別にっ、どっちでも……」

途端、ぱあっ、と屋凪が笑顔になった。

ああ。やっと分かったぞ。この気持ちの正体。俺はこいつを可愛いと思っているんだ。多分心のそこから。

「ありがとう！」

言い終わらないうちに、いきなり屋凪は俺に抱きついた。

「わっ！　おい屋凪、はなせって！」

こみ上げる嬉しい気持ちを振り払って、俺はその腕を無理やりはがす。

すると屋凪は、一瞬不思議そうな顔をして、最後にこういった。

「それと……私のことは「紫」って呼んで。霜次くん」

ちなみに霜次というのは、俺の苗字である。下の名前は、……まあ

別にどうでもいいだろ？
そんなことを考えていたらムダだそう思えるほど、屋凪……紫の笑顔は眩しく、本当に可愛かった。

さて、
言い忘れていたが俺には姉弟がいる
姉貴は高校二年生。演劇部らしく、家が遠いのもあって、帰ってくるのはいつも８時を過る。
いつもなら姉貴の分の夕飯は取っておく。だが今日は両親がいないためか、ファーストフードで済ますらしい。
弟はいつもなら一緒に留守番になるのだが、学校の宿泊研修で明日になるまで帰ってこないハズだ。ってか新学期早々から宿泊研修ってどうなんだよと思うのだが、まあそれは俺が小学校に通っていた頃からだし、俺たちの始業式が一般より遅いのもあるから最早どうでもいい。
　とにかく、今晩の俺は一人となっていた。いつもは退屈を持て余すぐらいなのだが、今日ばかりは紫を匿うためにはかなり好都合だ。
　こんな事は滅多になかった。家の母の基本主義は「一家団欒」であり、姉貴以外の四人はよくともに飯を食べているからな。俺が一人で晩飯を食うのは本当に珍しいのさ。……今日ばかりは一人ではなさそうだけどな。

襲撃は突然に／お前とあの人は・・・・・・

午後七時２０分。
「いただきます」
紫が両手を合わせた。無論俺も。
というのも、ちょうど１０分ほど前、
「霜次君の口に合えば、いいけど……」
部屋を二人で使えるようにした模様替えが終わったとき、紫はそういって肉じゃがの入った鍋を渡してくれた。わざわざ俺のために持ってきてくれたらしい。
ちょうど食べる物がなかった俺にはありがたかった。
そして今、その食事をしているわけだ。
「食べて……くれるの？」
彼女は可愛く開いた目を近づけてきた。思わず目を逸らす。
「あ、ああ。ちょうど腹減ったし、食べるものもなかったしな。……食っていいんだろ？」
「う、うん……。そのために持ってきたから……」
「じゃ、頂くぜ」
そういって皿に盛り付けた自分の分を軽く一口、食べた。
「どう……？」
紫は心配そうに顔色をうかがってくる。
ふと、俺はこの味を知っている気がした。一噛みするたびに口に染みこむ甘いタレを感じるたびに、脳内に浮かんだ違和感は段々と確かなものに変わっていった。
「……懐かしい、というヤツだな」
「……え？」
意外な言葉に驚いている紫。それもそうだ、美味いかどうかの質問に「懐かしい」なんて返答が帰ってくるとは思わないだろうし

な。……ついでにこいつにも話しておくか。俺の記憶のこと。別に隠す必要もないし。
「今日俺が倒れたのは、失ったはずの記憶が戻りはじめたからなんだとおもうんだ。……上手くは思い出せないが、俺の忘れた記憶の中には多分、俺にとってすごく大切な人もいる、そこだけが分かった。……この肉じゃがは、なぜだかその人を思い出す、そんな味がする」
紫は真剣に聞いていたが、そんな姿もどことなく可愛い。……ってなにを考えているんだ俺は。俺に無口属性はないはずだ。ロリコンだし。
いや、以外にこいつ、ロリじゃないか。体形とかいろんな意味で。
――って、何を考えてるんだ俺は。
邪念を捨てたところでふと、ある事に気がついた。
「紫」
考え込んでいた紫は「なに？」と返してきた。　思えばちゃんと「紫」ってこいつを呼んだのはこれが初めてだな……どうでもいいが。
「肉じゃがの味云々だけじゃない。なんかこう、雰囲気自体がお前に似ているような気がする」
「……誰に？」
「その人さ」
すると紫は再び考え込んだ。
「やっぱり……。もう、この世界の寿命は残り短い……の、かな」
ん？
「どういう意味だ？」
すると紫は俺のほうを向いて、
「まだ詳しくはいえないけど、もしかしたらこの世界は……」
よく見ると、紫は先程よりも真剣な目をしている。
「この世界……寿命……」
そういえば千子は言っていたな。「私はこの世界とは違う、魔

法の世界から来たの」。アニメや特撮でいう「異世界」というのは、実際に存在しているのか。そしてその中にあるこの世界は、もう終わりを向かえつつある……、ということだろうか。
「……ねぇ、霜次君」
「ん？」
「私、実は――」
そこまで紫が言った途端、急に目をそらした。
「どうした？」
紫は急に立ち上がって、玄関のほうを向く。
「まさか……、こんなに早く……」
ど、どうしたんだ一体？
「霜次君、気をつけて」
いきなりなんだよ、といおうとして気付いた。紫の目はさらに真剣になっている。
「霊戦妖が近くにいる」
レイセンモウ？、聞いたことがない単語だな。
そういえばついさっきも聞いたことのない名を聞いたな。……確か「メアリアン」とか言っていたような気がするんだが……
「そう……。じゃあ、やっぱり――」
そこまで紫が言った途端、不意に扉が開いた。
そこに立っていたのは姉貴だ。どうやら帰ってきたらしい。
「どうした？」
俺が姉貴に近づこうとした途端、
「ダメっ！」
俺の左手が引っ張られた。紫だ。
何を……、言おうとした途端、前で声がしたために遮られた。
「ふふ……。鬼戦妖なんか連れちゃって。アジャスター君」
あじゃ……は、キセンモウ？
「霊戦妖……」
紫がそう呟いた。間髪いれずに姉貴が「はぁぁぁ」とか言って、拳

を上に掲げた。直後に姉貴は強い光に包まれ、俺は思わず目を閉じる。

再び開いた自分の目を疑った。姉貴は……化け物になっていたのだ。

襲撃は突然に／私のそばにいて・・・・・・

化け物と言う表現を撤回しよう。
どちらかと言えば……人魚？
「鬼戦妖から離れなさい。そいつはあなたを利用して。この世界を滅ぼすつもりよ！」
霊戦妖と呼ばれた姉貴がそんなこと言ったもんだから、一瞬紫を疑ってしまった。
「騙されないで、霊戦妖こそ、あなたを利用するの！」
しかし、紫も負けじと言い返す。いや、あの、状況が読めないんだけど……。
「その子はただの人間じゃないわ！　あなたを利用しようとする悪い悪魔なのよ！」
いや姉貴、そんな人魚みたいな姿で言われても信じようが――
――いや、逆なのか？
姉貴は、紫が……えっと、キセンモウ……だっけか？とにかくそれであることを証明するために、わざわざ自分から正体を明かしたのか？
そんな風に考え始めた俺に、それが間違っていないと言わんばかりの姉貴の声が聞こえる。
「ねぇ、そんな子とあたし、どっちを信じるの？　……まさかとは思うけど、実の姉を裏切ったりはしないわよね？」
確かにそうだ。と、俺は思った。現に、紫は姉貴に言い返せないようだ。紫には悪いが、やはり俺は姉貴を信じるぜ。
いきなり一夜をともに過ごすことになった女がいても、俺はそいつのウソにだまされるほどバカじゃないのさ。
俺は姉貴の方へ歩き出した。だが俺の脚は一歩歩いたところで前進不可能になる。振り返ると紫が俺の手を握っていた。
「放せ」

「いや……、ダメっ！」
しつこいぞ、足を蹴ってやろうか。そう考えた時、
突然り、俺の耳に息がかかった。
「お願い……」
体が、全身が行動できなくなる。俺の体はなにかに包まれた。
「行かないで……」
簡単に言うと。紫が、俺を抱いていた。
「私を、信じて……」
なんだ、お前……？
なんで、抱く？
さらにその瞬間、頭に激痛が奔った。
「う……っ！」
紫の顔が、ポニーテールの少女の顔と重なる。今朝と同じだ。
『行かないで……行かないでよ』
少女のポニーテールが、俺の肩を撫でる。
『私の……そばにいて……』
そいつは、泣いていた。
「もう、面倒くさいなぁ！」
そして、現実で姉貴がそう叫んだ途端、目が覚めるようにヴィジョンが遠ざかって消えてしまった。
気が付いたら俺は紫に抱き締められていた。ただ「抱く」じゃなくて、むしろ動けないように「締める」感じの抱き方に変わっていたと言うことだ。
「あたしが連れてく！　アジャスターはあたし達のものよ！」
姉貴がそう言って、飛んできた。まるで泳ぐように。　あれ、人魚ってこんなことできたっけ？
なんて言ってる暇はない。すぐ目の前まで来た。ぶつかる――と思いきや、「……させない…！」
の一言に遮られた。
まるで、空間の盾のようなものが俺達の前に現れたのだ。紫だ。

紫が声を上げた途端だった。
「ちょっと待ってて」
そう言って紫は俺を放し、目を伏せる。俺はその瞬間を聞き逃さず、見逃さなかった。
「鬼戦体勢」
言うが早く、紫の右手に……おふだのような物が現れる。
紫はそれを口にくわえて、また一言。
「鬼心装甲装着……。……変鬼っ！」
んで。
瞬きさえ許さないような速さで、紫の姿は激変した。

襲撃は突然に／魔法少女の次は・・・・・・

「私……、妖怪なの」
それが、改めて食卓の肉じゃがを口運び始めた俺に、鬼のような外見から元に戻って俺と同様に肉じゃがを頬張る紫の第一声だった。
しかし、やはりそれ以降の説明には覇気が無く分かりにくかったため（夕食前ほどではなかったが）、またしても俺が代弁しよう。
正確に言うところ、彼女は「鬼戦妖」と呼ばれる妖怪だそうだ。
普段は全ての世界から死人の魂だけが集められる「霊の空間」というところにて、死人の魂の行方を決める大王（つまり閻魔大王だ）の仕事の一部を受け持つ種族らしい。死んだ人間の仲でも閻魔大王に直接選ばれた由緒ある生命体なんだとか。
とにかく、そんな鬼戦妖の一人である紫は、ある日突然閻魔大王に「アジャスターの護衛に向かえ」と言われたそうだ。
その閻魔大王もどきはそろそろ世界の崩壊が始まるということを知っていて、それを食い止めるための重要な鍵となるアジャスターを守るために、鬼戦妖の中で最も若い紫を「いい機会だから様々な経験をつんで来い」と、俺の下へと行かせたんだとか。
そしてその説明を今のように脳内でまとめてから、たっぷりと時間を取って（その間に肉じゃがを食い終えた）、俺の口から最初に発せられた言葉はこれだ。
「ちょっと待て」
その言いぐさだと、まるでその「アジャスター」ってのがこの世界の中心といわんかのようだが……って、アレ？
「俺、たしか今日いわれたぞ。「アジャスター」って。　ってことは何だ、俺がその……お前の言う「世界の崩壊を食い止めるための重要な鍵」ってことなのか？」
「うん」
即答かよ。

「霜次君が、アジャスターなの」
……
笑えない冗談――なのだろうか。
いや、案外そうではないのかもしれない。これが真実だとしたら、つじつまが合う。
「……霜次君」
考えにふけっていた俺に、いまだに肉じゃがを箸でつついていた紫が更なる説明を加える。
「……あなたは、選ばれたなの。……アジャスターとして、この世界を、全ての世界を正しい方向に導く者として……」
選ばれた人……ねぇ。今時マイナーな特撮でもそんな言葉は使わないぜ。
「選ばれたって、誰に？」
「この世界の神」
は？　神、だって？
「あなたは……すべてをつなぐ鍵。唯一無二の存在。人となり、逸材を探していた神があなたを選んだから……あなたはそうなった」
「待った」
もういい加減に理解が追いつかなくなってきたから、俺は紫の説明に歯止めをかけた。ここで止めないと、俺の意見を聴いてくれなさそうだったからな。
「はっきり言わせてもらうぞ。さっぱりわからん」
すると紫はまるで俺がそういうのを悟っていたかのように、
「信じて。」
と、鋭い目で俺を見る。その目には虚実を語るような眼光は宿されていない。
仕方ないな。説明を続けてもらおうか。
「とりあえず、お前の言っていることを全て信じると仮定しよう。
すると、なぜ俺が選ばれたんだ。俺が一体なにをしたっていうんだ」
紫は困惑した顔つきになり、

「……分からない。あなたに力を授けたのは……あくまで、神だから……。神の考えは私達には理解できない……」
じゃあなぜ俺はその力とやらを任意に発動できないんだ？
「分からない」
分からない事ばかりだな。
「……とにかく、あなたは世界単位のアジャスターなの。……これだけは事実……」
やっぱり、納得するしかないのかな。さっきあんなものを見ちまったんだから。
そんな風に、とりあえず俺も納得の構えでいようと考えていた時だ。
「……あ……？」
突然紫は、座っていた椅子から転げ落ちた。
「紫？」
向かい側に座って説明を聞いていた俺は、紫が床に倒れるのを見逃さなかった。
「大丈夫か？」
椅子を立った俺が傍によると、
「……うん……」
と、今にも閉じそうな目で、俺へと言葉を続ける
「……こっちにはまだ……慣れていないから……疲れが……溜まっ……ちゃって……」
紫はまもなくして、目を閉じ、くたっ、として眠ってしまった。
箸が彼女の右手から滑り落ちる。
「……おいおい、マジかよ……」
さて仕方がない。俺はとりあえず、この……紫をどうしようか……

集合は突然に／仮入部、か・・・・・・・

第参章　「人造人間と俺の覚悟」

翌朝、俺達は学校へ向かって走り出していた。
いつもより早く起きたのに何故か。それは紫の朝食に色々手間がかかったからだ。
内緒で家に入れていたために親に作ってもらうわけにもいかず、紫は全くと言っていいほどお金を持っていなかった。　仕方なく俺が、今の中学生には厳しい月１３００円制の小遣いから買い与える事となった。
　しかし、まだ問題はこれだけでは終わらない。　紫が予想以上に食べるのが遅かったのだ。
　たかが朝食に約３０分もかかるとは……。おにぎり一つと缶のお茶。だったそれだけにここまで時間をかける奴がいたとは。正直驚いたぜ。
　ところで俺たちの学校には給食というものが無く、昼飯は持参するか購入するかとなっているが、まあ、これで昼飯用にお釣りを持たせたから金の問題は今の所ない。……足りるだろうか。二百六十円で。
ちなみに俺には母親が作ってくれる弁当を持たされていて、まあ俺はその弁当を分けてやってもいいのだが、まあそこは、さすがに男の舌についた箸につつかれる弁当を年頃の少女が口にするのはいささか不服だろうという、俺なりの優しさだ。
　……話がずれたが、とにかくそんな事情があって、俺たちがそれぞれ自分の席についたのはチャイムのなる１０秒ほど前だった。要するに、まあ一応セーフだったわけだ。

直後に始まったフリー教師（名前は覚えていない）が浅野担任が今日は出張とか、教科担当制だからどっちにしてもどうでもいい話を聞かされ、更に俺自身は昼休みに呼び出しを喰らい、挙句の果てに今日は日直でもあって、そんなこんなで嫌な一日の始まりとなった。

そして、現在。昼休み。

俺は今、今朝の呼び出しにしたがって、二階のワークスペースに向かっていた。ちなみに、この直前に日直の仕事をさき回しにしていたために少し遅れてしまっているのだが……もう終わっていたりはしないかといささか不安になっていた。

そんな不安をよそにいざワークスペースへとたどり着いた俺の前にいたメンバーは、元吹奏楽部と元演劇部の二年だった。ちなみに「元」というのは、これら二つの部活は人数の不足が理由で去年度の末期に合併し、「混合文科部」となったからである。

つまり俺、イブキ、千子（元吹奏楽部）の三人である。

……冷静に考えると不思議な組み合わせだ。俺と、イブキと、千子か。それはつまり「多分アジャスター」と「確実に一般人」と「自称魔法少女」ってことだからな。

そんな風に俺が考えていると、

「遅かったね。ウルル」

千子が声をかけてきた。折角なので俺は聞いてみる。

「先生がいないってことは、もう終わったんだな。何だったんだ？」

「部室の掃除をしろって」

「部室の掃除？」

混合文化部は、もともとは吹奏楽部の部室であった場所を部室としているのだが……なんでまた掃除などをすることになったんだ？

前年度の最後の活動日に学校で一斉に部室掃除したはずだが……。

「ウルルったら、忘れたの？　今日から進入部員の仮入部なの」

「あ、なるほど」
　そういえば、そのようなことを担任が行っていた気がする。しかしそうなると今日も部活か。面倒だ、まったく。

放課後。
先ほどの話し合いで部室は文芸部室を使用することになったため、今俺はそこへ向かう途中である。１週間も行っていないのに今日に限って行くのは、新入部員として一年生が来る日の一日目であるからだ。それが所謂「仮入部」であり、見学のほうはあらかじめ授業の一環として行われていた。
部室までたどり着いた俺は、とりあえずドアをノック。
「どうぞ」
という千子の声がするまでにそう時間はかからなかった。俺はノブを回して扉を押し、入室する。
じつはここ、中は結構狭い。
会議室にありそうな長い机が二つと、壁にかけられた六つのパイプ椅子。窓が一つだけあり、その近くには教室にもあるような木の机が置いてあった。その隣には木製の本棚。ざっと１６０冊ほど本があるが、ほとんどが過去に作られた文芸部雑誌だ。
千子は、その机の向かいの木の椅子に座っていた。
「オーシャ君は教室にトランペットを取りに行ったみたい。紫ちゃんはまだ来ていないみたいだよ」
何も聞かないでも教えてくれるのはいつもの事ながらありがたい。
ところで紫の件だが、編入生だからという理由で今日から仮入部することになっていた。昨日のうちに教師と話をすませていたらしいが、俺はワークスペースであのあと千子に知らされた。まあ、部員が増えるのはいいことだ。
やがてイブキがトランペットをもってやってきた。とくに変わった様子もなくケースからトランペットを出す。練習でもするつもりな

のだろう。
まあ別に話があった訳でもないから、俺は聞こえている音をＢＧＭとして聞きながら、他にする事も無いから棚にあった本を読み始めた。

集合は突然に／やって来たのは・・・・・・

待つこと三十分足らずで、紫がやってきて、
「一年生……連れてきた」
その一言が、俺たち全員を振り返らせた。
そしてその後ろにいた人影が、ぬっと体を出してくる。
「どうも皆さん、はじめまして。一年二組の未島来人です。僕のことは気軽に来人と呼んでください」
第一声がそれだった。
俺がそんな来人とやらに関する外見からのイメージを固めようとすると、イブキがトランペットの入ったケースを叩きながら尋ねる。
「来人とやら、お前は何支部希望者だ？」
「そうですねぇ……」
第一印象。来人、こいつはけっこうな美少年だな。
「表向きには、演劇支部希望です」
そんな来人がスマイルを浮かべた。なんだか女子高生なら「可愛い」とか言いそうな笑みだ。
……男には嫌われそうだが。
「ですが、正しくはアジャスター保護が目的です」
イブキ以外の2人が急に顔を真剣にした。たぶん俺も。
「あじゃすたー？」
そんななかで唯一、イブキの顔は？まみれだ。それを見た来人は、
「おや、ここには一般人が紛れているようすね」
と言って俺を指し、
「あなたに話があります」
と言った。俺に？
「その通りです」
そう言った途端、校舎にメロディーが流れ始めた。部活終了の合図

だ。
「おっと、時間ですね。下駄箱で待たせて頂きますよ」
と言って、部室を出て行った。
俺も続こうとすると、
「……これ」
紫が俺の後ろに立っていた。手にお札を持っている。
「あの人、気をつけた方が……いいと思う…」
と言って、その札を俺の肩に貼り付けた。
「メアリアンか霊戦妖、もしくは……第三勢力かもしれないから」
と言って、奥にある自分の鞄を取りに行った。
「私も紫ちゃんに同じく」
千子がその後ろで俺に話しかける。
「気をつけてね、ウルル」
「ああ、わかった」
なにか不審な気分になりながらも、とりあえず俺は下駄箱に向かうことにした。
第三勢力、か。これ以上俺の頭がパニックにならなければいいけどな。

来人は言葉通り、玄関で待っていた。
「やあ。あの二人は一緒ではないのですね」
来人は制服の襟を整えると、
「あなたもいろいろと、知りたいことがおありでしょう」
「ああ、いろいろと、な」
俺がそう返すと、来人は一度苦笑をうかべてから、
「まず、僕の正体を説明します。付いて来てください」
といって、歩き始めた。
俺は靴を履き替えて、そんな奴の背を追う。

集合は突然に／もう三度目か……

来人は言葉通り、玄関で待っていた。
「やあ。あの二人は一緒ではないのですね」
来人は制服の襟を整えると、
「あなたもいろいろと、知りたいことがおありでしょう」
「ああ、いろいろと、な」
俺がそう返すと、来人は一度苦笑をうかべてから、
「まず、僕の正体を説明します。付いて来てください」
といって、歩き始めた。
俺は靴を履き替えて、そんな奴の背を追う。

「僕は人工情報生命体と呼ばれている者です。わかりやすく言えば人造人間ですね。この時間より３００年ほど未来から来ました」
来人と歩む帰り道、俺は歩きながらそう宣言された。
「僕の使命はただ一つ、あなたに世界アジャストを行ってもらう事です」
ここで俺の質問タイム……のはずが、来人はさらに続けた。
「一応この時代で言うと、「機械」に部類しますが、僕等の時代では「情報」を具現化する技術があります。即ち僕は、「情報」の固まりなんですよ。正式名称は「ラーマ・チェ・カミラ」。全五台の試作品の中で、三番目の部類です」
煩わしいな。俺にそんなことはどうでもいい。
「まずは質問をさせろ」
「おっと、これは失礼」
来人は一度頭を下げるような素振りをしてから、どうぞ、と両手を広げる。

「俺が「アジャスター」と呼ばれているのはその「世界アジャスト」とやらを行うためなのか？」
「疑わないのですね。話が早くて助かります」
なんかもう、他の二人の事もあるから、疑うという選択肢が出てこなかったんだな。いやはや、慣れというものは恐ろしい。
「正解ですよ。実際にはすこし違いますが、まあ今はその程度の理解で充分でしょう」
微笑する来人。俺はついでにいろいろ聞いてみることにした。こいつ、他の二人より色々と知っていそうだ。
「俺の姉に擬態した人魚のような霊戦妖は、俺を「世界単位」と呼んでいた。これはどういう事だ？」
「アジャスターは三人存在します。あなたを「世界アジャスター」とするのならほかの二人は「時間アジャスター」と「空間アジャスター」とでも言いましょうか。元々はその三人の力は一人の人間が全てを手にするはずでしたが、状況が変わりました」
そのまま上を向き、
「今回の……この世界の神は幼すぎました。そのために力を分散して選択することで負担を和らげたのです。それが裏目に出たのでしょう」
「今回の？」
「神という存在は、おおよそ百年に一度、人間の意識の中にその魂の一部を植えつけるのですよ。植えつけられた魂には自我はありませんが、その力で下界の全ての人間を監視し、さらに主人格の知らないうちに世界を改変していくのです」
神……また面倒な単語が出てきたな。今までの単語とは違って思いっきり知っている単語だから、余計にタチが悪い。そんな風に考えていた俺の方に視線を落とした来人は、目を見開いた。
「おや、珍しい」
と、先ほど紫が付けてくれたお札を指差した。
「霊の空間の産物ですね。これを何処で？」

「紫が俺に貼り付けたんだ。お前が怪しい、ってな」
「なるほど」
と、納得したように呟き、
「じゃあこのフェルナンダイトはあのトランペットの先輩が持たせたのですか？」
といって、お札を裏返すと、そこに付いていた黄色い石を俺に見せた。が、俺はそれに見覚えがない。
「フェルナンダイト？」
「四武将の所持するフェルナンダリアの産物の鉱石です。魔力を宿し、主の持ち主とはその魔力で意識をつなげることが出来る、かなりレアなものですよ」
「よく分らんが、そのフェルナンダリアというのは？」
「俗称ですよ。こちらの世界では「魔法の世界」と言うべきでしょうか」
「だとしたらそいつは、千子が持たせたものだ」
どのタイミングからもたせていたのかは分かりかねるが。
「おや、だとしたらあの女性の先輩が四武将ですか。だとしたらあのトランペット先輩が一般人なのですね」
「まあな」
するとなんだか急に、来人は考えこんだ。
「どうしたんだ？」
来人は少し不思議そうな顔をして、
「おかしいですねぇ。確かに四武将ともあれば自分の波動を消すことは簡単ですが、ではあの人から感じた凄まじい波動は一体……」
何のことだ？
「言ったでしょう？　僕は人造人間なんです。だから何か特殊な力を持つものを見るとその波動を感じる特別な力を持っているんですよ」
ほう。
「じゃあ俺にもその波動とやらがあるのか？」

「結構……いや、かなり強いですよ。あなたの波動は８５００ほどですからね。さすがはアジャスターと言った所ですね」
ほかの連中はどれぐらいなんだ？
「紫先輩は６７００で、あの女性の先輩は１９０です。基本の人間の波動は１００から５００なので、てっきり一般人かと思いましたね。おそらく本当は７２００ほどでしょう。……しかし、一番の謎、トランペット先輩はなんと５９００にもなります。一般人の中にはまれにそういった特別波動を持つ人もいますが、この数値は一般人が持つような特殊数値の中でもトップクラスですよ」
俺の由緒ある友達はそんな特別人間だったのか。俺は人の事言えないけどな。
「波動の強さはその人の全体的な「強さ」ではありません。あくまで波動ですからね。強いて言うなら「因果」の量でしょうか……」
「……で、その数値は一体何の意味があるんだ？」
「波動は、その人の人格、個性、健康状態などが瞬時にわかるのです。……そこで質問ですが、あなたは記憶を一部失っていませんか？」
「ああ……なぜ分かる？」
「普通の人間なら……これは非常識人も合わせてですが、波動が８０００を超えると自身を制御できなくなったりするため、自身を維持するために一度自身の脳の一部を凍結させて、波動を低下させるはずなのです。この脳の一部を凍結させる現象はこの時代で言うところ……」
「記憶喪失ってわけか」
「その通りです」
ふぅ。
さて、ここまでの話を聞いた俺が何と言うか。
この一言に限る。
「信じられんな。証拠を見せろ」
俺がそう言うと、来人はまた微笑んだ。

「証拠、ですか？」
「俺が疑ってるのはお前の存在から、今までの話のことだ」
信じてやってもいいが、それには俺がお人よしすぎる。そう思った俺をどう見たのか、来人はまた笑い、
「ええ。実はその言葉が返ってくることも分かっていましたよ。だからこうして、貴方の傍で歩いているのです。……そろそろ来ますよ」
「来る？」
俺がそう尋ねたその時、
「霊戦妖やメアリアンと同じく、時間単位で貴方を狙う者達ですよ」
俺の正面に人が立ちはだかった。

集合は突然に／データ信号か……

「君が、世界アジャスターだな」
そう言って立ちはだかった男性は、右手を空にかざした。
「パッケル・カモン」
そいつがそう言うと、どういう手品か、そこにデータ信号のようなものが渦を巻き、やがてそれは門をイメージしたような直方体となった。男性はそれを腰に叩きつけると、そこの両側からベルトが展開される。やがてベルトは男性の腰に巻きついていった。
「変形・悪魔鎌！」
さらに男性がそういった途端、その両腕にまたしてもデータ信号が渦を巻く。渦が消えると、両腕は赤と黒のグラデーションのかかった鎌が、両腕の変わりに現れた。
しかし、もう俺は驚いていない。
この状況から推測すると、どうやら来人が証拠を見せてくれるようだったからな。案の定、来人は右手にデータ信号をまとっている。
「パッケル、カモン！」
来人の発言とともに、データ信号のようだった文字の羅列のようなものは、やがて直方体となった。
先ほどの男性違うのは、それは門というよりは窓に近く、その両隣は矢印のようなイメージであることだ。対抗戦力としての表れだろうか……どうでもいいが。
そしてそれを腰に叩きつけると、右向きにベルトが展開され、来人の腰に巻きつく。さらに来人はその直方体よりも十倍ほど小さい直方体を左手に持った。ここから見ると、それはＧＢＡのカートリッチみたいに見える。
来人は、カートリッチをベルトのカートリッチに差し込んで右向きに押し、

「サモン・アームドブレード・ライト！」
といった。
途端だ。
来人の右腕は肘から先が平たい剣に変形した。
長さは変わらず、チョップをだすときの手の形に似ているその剣は、日本刀と言うよりはナイフに近かった。
その剣を空にかざすと、ちょうどそこに振りかざされた男性の鎌の一本が引っかかる。
男性がすかさず二本目の鎌の根っこから触手を繰り出し、それを使って二本目を振りかざした。
「おや、一本じゃ足りないみたいですね」
それをみた来人は、そういって左手からもうひとつカートリッチを取り出した。それを素早くベルトに読み取らせる。
「サモン・アームドブレード・レフト！」
と言って、左腕の肘から先も、右とまったく同じ剣に変えた。そいつで二本目の鎌も引っ掛ける。
「君たちのような人には呆れますよ。お金で雇われているだけとはいえ、人の命を奪うなんて愚行を平気で行うなんて、ね」
来人はそういって、鎌を二つとも弾き飛ばす。さらに、いつの間にかベルトにセットされていたカートリッチを左肘で右向きに押した。
「追加・炎属性！」
……なぜ、それは日本語なんだろうか。どうでもいいが。
とにかく、そのカートリッチの影響か、来人の二本の剣は根元から炎を纏った。
「スタートアップ・タイムライド」
来人がそう言ったと思うと、
『ｔｉｍｅ－ｒｉｄｅ！』
一瞬来人の体がゆがんで見えた。
『ｔｉｍｅ－ｏｕｔ！』

来人の姿がもとに戻ったかと思うと、もうそこに、鎌の腕をした男性はいなかった。

何が起こったのだろう。後に来人から聞いたが、今はそれは省いておくことにする。

集合は突然に／もう今の俺は……

その夜。
紫は千子の家に泊まることになり、一日ぶりに一人用となった俺の部屋を元のように模様替えをしていたころ、一本の電話がかかってきた。
携帯電話ではない。家に誰もいない時間でも電話に出れるように、そんな時はあらかじめ子機を部屋に置いておくのだ。
とにかく通話ボタンを押し、電話に出る。
「もしもし、どちらさまですかー」
相手は、
「あ、ウルル？　あたしだよー」
「千子か」
「どうだった、来人君」
……いきなりか。お前は前置きという言葉を知らないのか。
とか思いつつも、とりあえず全てを千子に話す。来人の説明と、戦いのことを。
「へぇ、そうだったんだ。」
これが、千子の最初の反応。
「お前も似たようなモンだろ。……知らなかったのか？」
「うん。国王様は何も教えてくれなかったもん」
ここで、俺の質問タイムに入ることにする。聞いておかなければならないことを思いついたからな。
「お前が昨日俺を尾行していたのは、俺の記憶が一部だけ戻ったからなんだな。俺の記憶が戻ったことで、メアリアンが　動き出すと思った。……違うか？」
「うん。……まあ、尾行はしてないんだけどさ、似たような感じか

な」
「じゃあ何で霊戦妖は俺を狙うんだ？」
そこで千子は考えるように沈黙し、少したってまた口を開く。
「たぶん……、ウルルがメアリアンに奪われると思ったんじゃないかな。メアリアンと霊戦妖は目的は一緒だけど、考えていることが違うみたいだからね」
「じゃあ、来人と戦ったあの男も、同じ意味か。」
「うん。たぶんね」
つまり、三つの勢力が俺を拉致することを目的として、我先にと動いているわけだ。だからそこに、それぞれの対抗勢力である千子、紫、来人が配置された、と……。
「……もう一つ、いいか？」
「うん？」
本当は、コレを最初から聞こうと思っていた。昨日まで一介の中学生だった俺が、何ゆえこんなことに巻き込まれたのか。その根本。
「世界アジャストは、必ず行わないといけないのか？」
沈黙が、俺たちの会話を包む。
が、やがて、
「不安なの？」
と、千子から帰ってきた。
「俺は今まで、自分はこの世界のちっぽけな、本当にちっぽけな一部でしかないんだと思っていた。俺の代わりなんていくらでもいて、俺はこの世界にとってどうでもいい存在なんだ、って」
千子はまた、沈黙した。というより、黙って聞いてくれているのか。
その反応に、俺は意図せずぶつけるように続ける。
「俺見たいなやつなんてたくさんいると思ってたんだ。だから、こんな俺じゃなくても俺みたいな奴が、この世界に貢献してくれればそれでいいと思っていた。そして俺は、いつの間にか「世界にとって」じゃなくて「俺にとって」どうでもいい存在になっていったん

だ」
千子は、まだ黙っていた。
「そんな俺が、いきなりこの世界の主人公とか、世界を調整する、とか言われて……、俺みたいなダメ人間にはとても気が重いんだよな」
情けない話だ。そう思う。
しかし、これは俺の本心だ。
どうでもよかった世界から、いきなり必要とされて。
「こんなダメ人間が世界を救うとか――」
――できない、そういおうとしたその時。
「ダメ人間なんかじゃない！」
千子が、電話の向こうで口を開いた。
「ウルルはダメ人間なんかじゃないよ！」
同じことを言い聞かせるように言う。
俺はその言葉を聞いて、嬉しかった。この世界には俺を必要としてくれる、大事に思ってくれる人がいる。それを知ったつもりで、なにか心が晴れたような気が――、
「私たちにとってウルルは世界アジャスターとしてとっても大切な――」
――いや、思い上がりだったのか。
「世界アジャスターとして、なんだろ？」
たまらなくなって、俺は言い返した。何がたまらないのかは俺には分からない。
「今まで俺は、非常識なお前たちにただ振り回されているだけだと思っていた。だけど違う。俺が記憶を失ってしまったせいで、むしろお前たちが迷惑しているんだ。そうだろ？」
「そ、それは――」
千子は否定しようと言葉を発したが、俺は聞く耳などもってはいない。
「つまりお前たちは、今の俺じゃなくて、昔の記憶を持った俺を望

んでいるんだろ？」
信じたくないけどな、これが事実。
「違う、私は……」
「勘違いするな、俺はそれでもいいのさ」
嘘だ。
「俺は今まで通り誰にも必要とされず、ただの俺として生きて生きたい。だから――」
その次に何を言おうとしたか、分からなかった。が、
「嘘つき！」
それを、いきなりとても大きな声を出した千子が遮った。
「嘘つき、ウルルの嘘つき！」
ビックリして言葉を発せない俺に、どんどんせめて来る千子。
「ウルルは、人ともっと仲良くしたいと思ってる！」
声のトーンは変わらず、叫ぶような台詞が鼓膜を震わせる。
「絶対、ウルルは一人きりを嫌がってるでしょ！」
千子は少し間を空けて、すうっ、と大きく息を吸って、前よりさらに声のトーンをあげてこう言った。
「全部、嘘なんでしょ？」
その一言をきっかけに、声のトーンがゆっくりと戻っていく。
「一匹狼も、自分なんてどうでもいいとかも、……そうやって今のウルルを否定して、過去の自分を尊敬しているようなその口ぶりも」
すぐに息を吸い、また決めゼリフを言うように、言った。
「私は、今のウルルが、心の中では「なんで昔の俺しか、皆は見てくれないんだ！」って言ってるようにしか聞こえないよっ！」
――っ！
「ああ、そうだよ！」
もう、我慢できない！
「全部嘘だよ！　俺は傍観者なんて望んじゃいないさ！　ただそうなっちまったから、そのまま過ごす道を望んでるんだよ！」
俺は叫んだ。初めて、心の底を。

「俺はな、始めてお前と会話した時、すげぇ嬉しかったんだよ！
こんな冴えない男に話しかけてくれた、とっても優しい女の子がいたんだ、って、感動すらしたさ！」
一年の頃、クラスになじめず窓の外ばかり見ていた俺の、あの頃の思いが心をよぎる。
「でもな！　それは思い上がりだった！　お前は最初から、俺がアジャスターとして復活するのを望んで、だから俺に話しかけて、俺に近付いた！　俺は昨日、それに気付いちまったんだよ！」
あの笑顔も、手も、言葉も。全ては俺ではなく、昔の俺へと向けられていたものだったんだ。アジャスターとして、世界を救おうとしていた俺を。
「紫や来人だってそうさ！　紫も俺に自ら近付いたかと思えば、やっぱり俺じゃなくて、過去の俺のためだったんだ！　来人なんかはストレートにそう言っているようなものだったしな！」
結局三人共、俺を見てはいなかった。
俺の中で眠っている「アジャスター」にしか興味がなかったんだ。
「それで、今度は今の俺に「アジャスター」としての仕事をさせるってか！　なんなんだよもうっ！」
俺の心の中には、俺しかいない。「アジャスター」なんて存在は、ない。
それなのに、
「どれだけ俺を、アジャスターに仕立て上げれば気が済むんだよ！」
それが、俺の本当の心だった。
今まで傍観的な考え方をしていたように振舞っていたが、本当は違う。
次々に、自分の周りの人間が自分ではない自分に期待していることに気が付いて、それにずっと気付かないフリをしていたんだ。
けど、もう限界だ！
「俺はアジャスターじゃない！　世界を救うのは、俺じゃない！」
俺は、いつしか涙を浮かべていた。その言葉を最後に脱力し、押

し黙る俺。
少しの沈黙があった。
が、やがてそれを破る声が、千子から発せられた。
「ウルル」
その言葉は、俺の想像を絶する物だった。
「わたしは、今のウルルが大好きだよ」
出会って初めて、千子のセリフにドキッとした。
「私は」
「私は」
不意に、声が重なって聞こえている事に気がついた。電話を当てている右耳と、誰もいないはずの廊下からする、まったく同じ声。
電話が切れる音と扉が開く音がして、目の前に栗色のウェーブヘアーの人影が現れた。
「無責任な昔のウルルより、今のウルルが、好きなの」
そいつの顔を見て、立ちすくむ俺。
不意に、頬に暖かい雫が、零れた。
「大丈夫。私は、今のウルルにいてほしいから。アジャスターなんて関係ないよ」
そいつの右手が、親指が、俺の左頬とその雫を、拭った。
「ただ、大好きなの」
泣きたかった。
後で恥をかいてもいい。とにかく、泣きたかったんだ。
だから、俺はそこで泣いたんだ。

俺を必要としてくれている人がいる。それだけで、俺の心は変わった。
その人が望むことのために、俺はこの体を使おう。
アジャスターとしての運命を受け入れたのは、この時だ。

覚醒は突然に／事態が動くかもな……

俺は朝が好きだ。二度とない一日一日の始まりと言うだけで、ワクワクする。

翌日。

窓の外からの爽やかな朝日が、俺の体を包んだ。

春の陽気な風を腹いっぱいに吸い込んで、「すがすがしい朝だぜ」とか言おうと思ったとき、部屋をノックする音が響いた。

俺は気持ち切り替えて、部屋のドアをあける。と、

「兄貴、電話」

弟が、電話の子機を持って立っていた。

「貸せ」

俺は弟から子機を奪い取り、電話に出る。その相手は、

「もしもし」

「やあ先輩、未島です」

来人だった。奴は昨日となにも変わらない、人当たりのよさそうなスマイルでも浮かべていると真っ先に想像できるような、軽快な声色を出している。

「いきなりですが、今日の十一時ごろ、朱藤先輩の家の前に集まれますか？」

本当にいきなりだな。

「別に大丈夫だが……何をするんだ？」

「来れば分かります。それと、先輩の両親には昼食はこちらで取る、と伝えてください」

俺は無条件で外食決定か。……まあ、いいけどな。

「手ぶらで構いませんよ。必要なものはすべてこちらで用意しますから」

用意？　どこか行くのか？
「世界アジャストへの出発予定を決定したい、そう思っています」
……ふむ。俺は少し考えた。
「その、世界アジャストとやらはどうやって行うんだ？」
「詳しい詳細は後におって話し合いましょう。そのための集まりです」
そう言われて、俺はずっと思っていたことを来人に話した。
「そこに、イブキを連れて行ってもいいか？　あいつは昔からの親友だ。隠し事は無しにして置きたい」
来人は考え込むような沈黙を作り、
「いいでしょう。先輩がそれでいいのなら。」
と、答えた。
「ただし、本人が希望しない限りは世界アジャストには同行できません。これには様々な理由がありますが、大前提として、身の危険があるのは、言わなくてもお分かりですよね？」
その辺りは察しがついていた。俺の体が覚えているからな。
「勿論だ」
「了解しました。それではイブキ先輩もこの話し合いに呼んでください。こちらとしてもいろいろと言いたい事がありますので」
ああ、伝えておくさ。
「それでは、また後ほど」
「ああ」
そう言って、俺は電話を切った。
さて。
いよいよ事態が動き出したな。魔法少女と鬼と人造人間、その三つが集まったのだから、これで何かが起きても最早驚きの余地はないだろう。
とはいえ、ケッタイな肩書きを持つ三人の人間がどう関わるのかは分からないが、その中心にはいつだって「俺」という存在があった。

つまり、俺には他の三人よりも大きな変化、大きな事態が起きてもおかしくはないんだ。それぐらいの心の準備はしておいてもいいかもな。

……まあでも、今はとりあえず。

朝飯の時間だ。

同日九時三十分。

イブキは俺の家に来た。

俺たちが一時間以上前に待ち合わせ、イブキに全てを話すために、俺が呼んだのだ。

が、イブキは案の定信じてはくれない。仕方がないので、俺はとりあえず来人のもとで説得することにした。

覚醒は突然に／俺は当事者なんだ……

ということで、そろそろ出発しようとした十時三十分。
不意に俺の家の玄関のチャイムがなった。
「む？」
ちょうど俺たちは出発前であり玄関付近にいたため、母親に「俺が出る」といって戸をあける。
途端だ。
いきなり何かが倒れてきた。全長は俺たちよりもやや低いだろうか、とにかくそれを条件反射で支える。
不気味に暖かい何処か不安を思わせる温度の、どろっ、とした液体が俺の目にかかったため、視界を一時奪われた。
そして、俺の手もその液体に触れた。量はそれほど多くないようだ。
その奥には布がある。俺の手はそれにも触れた。直後に視界が回復し、やっと見えたものは――
「紫！？」
紫が倒れてきたのだ。顔の半分を赤色の液体で染めて。
やっと理解した。これの液体は……血だ！
紫の血は、左の腰あたりからじわじわと服に滲んでいる。なんてこった、心の準備をしたとはいえ、こんなことは想像だにしなかったぜ。
紫に意識はあるのだろうか、とりあえず聞いてみる。
「おい、しっかりしろ！　何があった！」
紫はやはりというか、答えることも無くただぐったりとして、目を閉じている。
不意にいやな予感がして、俺は紫の手首に人差し指を乗せた。目を閉じて指に神経を集わせ、その動きを確認し――、

――脈が、ない……？
「死んでる……、のか？」
イブキが目を見開いて、俺を見つめる。俺が頷こうとしたとき、
「大丈夫……だよ」
と、どこからか声が聞こえた。
それは微かだか、ちゃんとした紫の声だ。
「私たち鬼戦妖は、魂と肉体を自分の意思で分離できるから」
……分離？
「通常の人間は……魂を目視できない。でも、私は今あなたの前で、肉体の修復を開始している」
ふと見ると、紫の体の血は止まっているどころか、肉体に吸収されていく。瞬く間にすべての血は肉体に吸収され、傷口がふさがった。気がつけば、俺の人差し指は定期的な振動を感知している。
驚く間もなく、俺が抱いていた「紫」の目が開いた。
「魂と肉体を……また、繋いだ」
と、説明してくれる。
一体何が起きたんだ。改めて俺がそう問おうとしたとき、もうひとつの人影が転がり込んできた。
そいつは立ち上がり、こちらを向く。
「大変なことになりましたねぇ……」
その人影は、朝の軽やかな声色など微塵も感じない、緊張感に満ちた来人だった。
「予想よりも早く世界の崩壊が進行しています。僕らが統計から逆算した侵食速度を大きく上回っています。著しく予想外です」
来人は俺に自分の左腕を見せて、軽くデコピンをした。すると、肘より先の部分が崩れ落ちた。……って、え？
「僕の腕もこの通りです。メアリアンも相当しぶといのを送ってきたようですね……」
ふと見ると血液の代わりに、切れた腕から電気が流れ出している。ショート現象とでも言うのだろうか。そういえばこいつは人造人間

だったな。忘れていた。
　来人は、同じように電気が流れ出している自分の左腕の切り口を押さえるようにしながら、深刻な声で言った。
「現在、この家は計三千近くのメアリアンに包囲されています。朱藤先輩の結界が世界崩壊の影響で砕けた途端、メアリアンはこれだけの戦力を送ってきたのですよ。今は四武将の方々が戦ってくれていますが、時間の問題でしょう」
　正気……なんだろうな。もう疑うという選択肢すら俺にはない。紫が一度殺され（たんだと思うが、よく分からん）、来人の左腕が壊れた。二人とも以前の戦闘では圧倒的な力の差で敵を追い払ってはいたが、そんな二人が今回はそれだけの負傷を受けたんだ。それはつまり、それ相応に敵戦力があるということになる。
　そう考察する俺に、来人は、
「あなたの力が必要なんです」
　といって、右手で左腰のホルスターみたいなものから一枚の紙切れを出した。それを俺に差し出して、俺の顔を窺う。
「これが何かわかりますか？」
　分かっていたら、回りくどい見方などしないでも、名称で示しているさ。
「でしょうね」
　というと、来人は紫を見た。紫は頷いて俺を見て、その場に立ち直った。
「私からも、これ……」
　そして、俺に卵型の板を差し出した。板には黄色い文字で「ＴＡＭＡ－ＧＯ　壱式」と刻んであった。
「分かる……？」
　と、いわれてもなぁ。解等は先ほどと何の変わりもない。
　そんな俺の様子をどう思ったのか、二人は顔を合わせて小さなため息をつき、
「やはり、アジャスターとしての記憶が完全に消えていますね。」

「……そうみたい」
と、言い合ってから、不意に紫が俺の手を取った。
「ついてきて」
といって、歩き出した。俺は引っ張られるがままに、紫の動きに従う。今更抵抗する必要もないし、りそんな気も毛頭ない。俺は当事者で、傍観者じゃないんだからな。それを理解してなお抵抗するような行為は、それこそ敵前逃亡をするようなものだ。そんなの俺のプライドに反する。
そう思う俺の後ろからは、来人の「先輩も来てください」と、イブキの「お、おう」という声が聞こえた。

覚醒は突然に／再び目覚める時……

家の外を見て愕然とした。
まず目先に入ったのは黒い波。その真上には黒い雲が浮かんでいた。空全体を埋め尽くさんといわんばかりに、波が少しずつこちらに浸食とするたび、横から閃光の光線が飛んでくる。それにより波の一部はふき飛ばされ……ん？
飛ばされたの、は微妙に人型の生命のように見える。ということは……。
この波、この黒い物すべてがメアリアンの軍隊なのか！？　来人は三千近くと言っていたガ。それってってこんなに多いのか？　じゃああの雲も……。
『メアリアンも相当しぶといのを送ってきましたからね』
不意に来人の声が蘇る。これは流石に、来人たちが苦戦するのも分かる。力でダメなら数……悪者の考えそうなことだ。
なんてこった、心の準備なんて、まるで無意味じゃねぇか。腰を抜かさない程度には聞いているのかもしれないが。
「響け！　鐘の音の元に！」
俺の視界のかなたで声が聞こえたかと思うと、ビュン、と俺の前を光の球が横切る。途端、光の球は俺のところまで戻ってきた。光が徐々に消えていき、人の形になって現れる。
「ウルル、来ちゃダメ！」
その光の球は、千子になった。千子が、あの時の天使装束で俺の前に立ったのだ。
その千子の様子をみた来人が、
「作戦を変更します。アジャスターとしての記憶をほんの少しでも取り戻してもらえれば、なんとかなるはずです。朱藤　先輩、あれを渡してください」

「でも……」
千子は躊躇うように俯く。アレってのは一体……俺は来人と紫の手元の未確認物体を見つめて、そう考える。分かりもしないと分かっていてもな。
「先輩も分かっていますよね」
来人は続け、千子に詰め寄る。
「それに、先輩も覚悟は出来ているようですよ」
その言葉を聞いた千子は、俺を見た。俺の顔色を見て困惑な表情を浮かべた。「それでいいの？」という意を、その表情から感じる。
が、
「来人の言うとおりだ」
俺は臆しない。臆してなどいないんだ。
「お願いします」
来人がダメ押しといわんばかりに、俺に続いてそういう。
それから少し俯いたが、やがて千子は頷いた。
その傍ら、
「鬼心装甲装着……。変鬼！」
紫が、俺の隣りであの時とおなじようにお札を咥えた。紫は一瞬であの鬼姿に切り替わり、千子に卵形の板を渡す。
「時間がない。早く！」
そう言った紫は、上を向き、地面を踏み蹴った。そのままジャンプ……と言うよりは、むしろフライに近い意味で、飛んだ。さらにその背中からは、紫色の翼が生える。どうやら上のメアリアンと戦闘を行うつもりらしい。
そんな紫の姿をみていると、
「ウルル」
千子が、右手に球体を持った状態で、来人から受け取った小さめのカードを持っている↑手を肩の高さまで上げた。
「目を閉じて、私の左手に触れて。なにも考えないで」
千子があまりに真剣に言うから、俺はそれに従う。

「悪く思わないでね。あたしも……本当はやりたくないの。でも、こうするしかない」
その言葉を聞くと、不意にカードの感触がなくなり、変わりにボールのようなものの感触がした。
さらに千子は、何かをつぶやいた。
それも、あの時のメアリアンのように。早く、小さく。
それが、視界を塞いだ分活発になった俺の聴覚を埋め尽くした。
途端――っ！

「ねぇ。何でこんな所で泣いてるの？」
俺に、一人の少女が話しかけていた。
泉谷大橋の下、普段なら人目につかない所で。
「別にいいだろ。何でも」
俺はそう言って、また顔を伏せた。
「つまんないなー。教えてくれればいいのに」
少女はそう言ったかと思うと、急に黙りこんだ。
なにか言ってやろうかと思っていると、
「よしっ、」
少女は立ち上がった。
「私と公園に行こっ」
と、笑顔で俺に言う。俺は無視しようとして顔を背けようとする。
と、
「照れない照れないっ」
そう言って、少女は無理矢理俺の腕を引っ張っていった。
振りほどこうとすると、少女は俺のほうを向いて……
ただ、笑った。
それだけなのに、その子に惹かれてしまった。

俺の後ろで、彼女がすやすやと寝息を立てている。
「こうやって見ると、結構可愛いじゃん」
俺がそう言って、彼女を背負い直そうとすると、
『結構可愛いじゃん』
と、俺の声で言っている声が聞こえた。
ビックリして振り返ると、彼女は録音機の再生ボタンを笑顔で押した。
『結構可愛いじゃん』
「へへ。録音しちゃった」
「あっ、こら！」
とりかえそうとして、右手を振りかざした途端、
「！」
俺の唇に、暖かくも湿った感触が広がった。
背中から、彼女の感覚がなくなる。
「おんぶ、ありがとね」
彼女は得意の笑顔を振り、
「始めてだったけど、どうだった？」
と、もじもじと聞いた。
答え、決まってるじゃないか。
ありのまま言うと、彼女はにっこりして、再生ボタンをまた押した。
さっきとは少し違う、俺の声がした。

覚醒は突然に／不思議な感覚だが……

「成功……した、のかな」
千子が俺の手を放し、荒く息をついた。……なんだったんだ、今のは。
何かを感じた。二つのヴィジョンが時空を越えて俺の脳に届いたかのような、まさにそんな状態に、俺は陥っていたのだろうか。
俺は自分の両手にある卵板を、ある衝動に駆られて合わせてみた。思った通り、重ねるとピッタリだ。そして、その形を見た途端、
『本当に不思議だ……』
「来人！」
「は、はい！」
「お前、俺のベルトを持ってないか？」
「これですね」
来人は俺に丸薬のような物を渡した。何もためらわず、俺はそいつを口にいれる。
『何でだろう……』
俺の腰に、来人のバッケルのように一部分が機械化しているベルトが巻きついた。いや、むしろ現れたと言うべきか。体内から生えてきたかのように、俺の腰に出現したんだ。
『俺は……』
やってみるか、一丁。
『こいつの使い方を……』
卵の先を人差し指で押すと、パカッ、と上半分が開く。
『知っている……』
「起きろ（ウェイクアップ）」
俺の目の前に「ＵＮＬＯＣＫ」と言う黄色い文字が、空気中に浮かんだ。途端に卵から鎖がうまれて、それが砕ける

「行くぞ（セットアップ）」
俺は卵板を、左向きに投げた。卵板はそのまま俺の腰を、地球の周りを回る月がそうするように、ベルトとある程度距離をとって公転軌道上を飛び回る。
「解鍵！」
言葉と共に、卵板はベルトの機械部分に自動で合体した。
『Ｃｈａｎｇｅ！　Ｗｏｒｌｄ　Ａｄｊｕｓｔｅｒ！！』
表現が正しいとは言えないが、卵板がそう言う。
そして、俺の体にアーマーのような物がつけられはじめた。
肩から後ろ向きに伸びる二本の角、右腕に銀色の筒が巻き付き、同じ物が俺の両足の脹脛の部分を締めつける。
額から耳の後ろを通り、あごで繋がっているプロデクターのような物から、後ろを包むヘルメットのように俺の後頭部を守る。そして……
……なんだこれ。
左腕についているスペードを象った板が、薄い黒を示している。
全く知らないはずなのに、使い方だけは知っている。
記憶が戻ったのかもしれない。が、俺はその自覚がない。どういうことだか、自覚のないまま使い方が分かる。何と表現すればいいのか、まるで人間が腕を動かすことを普通としているのと同じように、というのか。本能で分かってるのか、それぐらいのレベルで俺とこの味覚人物体たちが連結しているのか。
……まあいい。今は、深く考えるのは止めておこう。今はやれることがあるなら、やるしかない状況だからな。
「双剣召喚準備（コール・ティラーカード）」
左腕を構えると、中から一枚のカードが飛び出てきた。それを右手で取る。二つの剣の絵が描かれた、小さなものだった。
「タマゴウ！」
ベルトの正面についている卵板の先端を叩くと、解鍵時同様に上半分がパカッと開く。開いた側の板にそのカードを差し込む、とい

う動作を、俺の本能がしてのけた。
『Ａｄｊｕｓｔｅｒ　Ｗｅａｐｏｎ』
板を閉じると、そこからカードの絵のまんまの剣が、二本出てきた。こいつは……昔俺が愛用していた武器だな……多分。そんな気がする、という、そうだと俺の脳が言っている。
不気味な感覚だが……仕方ないな。よし。
「派手に、行くぜ！」
俺は地面を力強く蹴り、目の前のメアリアン軍団排除へと走った。
「あ、ちょっともう！」
「僕らも負けていられませんね、先輩」
「うん、がんばろう！」
俺がそうする後ろで、千子と来人も戦闘再開をするのが分かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9799r/

世界を救うのは俺じゃない

2011年12月15日00時47分発行